日本国際理解教育学会会報 vol.48
JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

2015年度　No.2　2016年3月31日　編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒192-0393　東京都八王子市東中野742-1　中央大学文学部　森茂岳雄研究室
TEL/FAX：042-674-3852　E-mail：jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp
Website：http://www.kokusairikai.com/　Facebook page：日本国際理解教育学会facebook

目次

会長挨拶 1
第26回研究大会実行委員長挨拶 2
紀要編集委員会報告 4
研究・実践委員会　公開研究会報告
　尼崎小田高等学校 4
研究・実践委員会　公開研究会報告
　神戸大学付属中等教育学校 5
国際委員会報告 6
第16回韓国国際理解教育学会報告 7
理事会報告 8
事務局通信 9
事務局からの連絡とお願い 10

【会　長　挨　拶】

2013-15年度の3年間をふりかえる

会長　藤原　孝章

2015年度は、学会としては、3年に一度の理事選挙の年にあたりました。その結果、12名の理事が選挙によって選ばれ、2016年1月9日の公認理事（選挙選出理事）の会合におきまして、会長に私（藤原）が、副会長に、永田佳之会員、中山京子会員が選出され、次の3年間の学会運営の重責を担うことになりました。また、事務局長および各委員会委員長、会長選出理事など20名の理事会構成メンバーが、現在決まっております。正式には、6月の第26回研究大会総会（上越教育大学）において承認されることですが、引き継ぎを含め、新しい理事会は3月下旬から始まっています。

各会員におかれましては、学校や地域において、身近な研究会、ネットワークなどを活用されて、日々の研究実践に精進され、学会活動に積極的に参加していただきますようお願いいたします。

さて、2013年度からの3年間は、世界や日本の状況も大きく変化してきました。シリアの内戦とそれにともなう多くの難民の輩出、EU諸国への庇護を求める動き、「イスラーム国」などの勢力拡大と、パリをはじめとする都市での爆弾テロなどがあり、移民や難民、ムスリムに対する排外主義などが台頭しています。東アジアでは、中国の経済的な成長と覇権主義は、国境問題に象徴されるように、米国もふくめた日韓中のバランスに変化をもたしています。

このようななか、日本国内においても、保守党政権のもとで、集団的自衛権を容認する安全保障の議論は、憲法9条の解釈をめぐって、国会のみならず市民の政治的な意志表示にまで拡大し、国民的な議論になりました。評価が分かれるところですが、SNSなどネットのなかの「言説」と連動したポピュリズム政治もこの3年間に進行しました。

また、人口縮小や経済成長の相対的低下をみすえ、グローバリゼーションのなかでのナショナリズムの動きや、「グローバル・リーダー」育成のかけ声のもと財源の選択的投資が行われています。小学校における外国語（英語）の教科化、小中学校における道徳の教科化や高等学校における新科目「公共」などが学校教育にも及んできています。

内外とも国際理解教育にとっては困難な状況であることは間違いがないですが、多くの出版物やこれまで培ってきた学会の課題研究の取り組み、各会員の研究大会での数多くの研究発表、ESD（持続可能な開発のための教育）やグローバル・シティズンシップ教育へのコミットメントなど、有形無形の財産を生かして、学校や地域など足元の課題に、あるいは、SDGs（持続可能な開発目標）やポストESD10年のユネスコなど、国際的な教育の動向を確実にとらえていくことが求められています。

国策としての「グローバル・リーダー」育成は、競争社会のリーダーなのか、連帯（共生）社会のリーダーなのか、ローカル、ナショナル、グローバルなアリーナ（課題空間）における多元的で重層的なアイデンティティと市民的資質の育成をめざしてきた国際理解教育の真価が問われています。

【日本国際理解教育学会　第26回研究大会実行委員長　挨拶】

上越教育大学大会のご案内

上越教育大学　釜田　聡

日本国際理解教育学会第26回研究大会を６月17日（金）～６月19日（日）の３日間、上越教育大学（新潟県上越市山屋敷町）にて開催させていただくことになりました。本学での研究大会の開催は、1998年第８回大会以来の18年ぶり２回目の開催となります。

今回の研究大会は、日本国際理解教育学会と上越教育大学の共催での開催になります。また、新潟県教育委員会、上越市教育委員会、糸魚川市教育委員会、妙高市教育委員会、柏崎市教育委員会、新潟県国際交流協会、上越国際交流協会の後援をいただきました。

皆様のご支援・ご協力のおかけで、現在（３月中旬）までに、国内外から60本近くの発表のエントリー（特別分科会、自由研究、ポスター）がありました。この場をおかりして感謝申し上げます。

本学キャンパスは上杉謙信居城の春日山の山麓から南東方向の平野部に横たわる緩やかな丘陵地帯に位置します。北陸新幹線の駅「上越妙高駅」から大学キャンパスまでは北西に約８km、JR高田駅からは北西３km、JR春日山駅からは南西約２Km、直江津駅からは南西約４kmの距離にあります。

本学が所在する上越市は、新潟県南西部に位置した人口20万人の都市であり、市の中央部には、関川、保倉川等が流れ、この流域に高田平野が広がっています。古来より、政治・経済・文化の中心地として栄え、奈良時代にはこの地に越後国府が置かれるとともに国分寺が建立され、1549年には上杉謙信の居城が春日山に築かれ、当時の城下は京都に次ぐ人口を擁し、殷賑を極めたと伝えられています。

また、五智の国分寺をはじめ、上杉謙信ゆかりの春日山城跡や林泉寺、高田公園の夜桜や外濠の蓮の花、日本スキー発祥の地である金谷山等々の文化遺産が多数存在しています。古くから交通の要衝として、越後の都として栄えましたが、現在でも上越地域の中心都市として都市機能が集積され、重要港湾である直江津港、北陸自動車道と上信越自動車道、JR信越線、ほくほく線に加え、2015年から北陸新幹線とえちごトキめき鉄道が開業するなど、陸・海の広域交通の結節点としての拠点性は一層高まっています。

本大会では、これまでの研究大会同様に、自由研究発表とポスター発表、公開シンポジウム、課題研究の他に、第１日目に上越教育大学附属中学校（新潟県上越市本城町）にて、公開授業研究会（日中共同「異己」理解共生授業）を開催いたします。また、第２日目の懇親会は、国登録有形文化財の料亭「宇喜世（うきよ）」で行います。「宇喜世」は、江戸時代末期にまで遡るという由緒ある書院造の荘厳な建物が自慢の老舗料亭です。国登録の有形文化財にも指定され、城下町・上越高田の歴史の一端を担っています。「宇喜世」ではその趣ある建物の歴史を感じながら参会者の皆様の交流の場になることを願っています。

主な大会日程は次のとおりです。

第１日目：６月17日（金）：上越教育大学附属中学校
　日中共同「異己」理解共生授業公開研究会、理事会
第２日目：６月18日（土）：上越教育大学
　自由研究発表・特別分科会、ポスターセッション、
　総会、公開シンポジウム、懇親会（宇喜世）
第３日目：６月19日（日）：上越教育大学
　自由研究発表、課題研究

以下、大会の概要を説明致します。

第１日目、上越教育大学附属中学校にて、14時から日中共同「異己」理解共生授業公開研究会を開催します。この公開研究会は、本学会国際委員会が進めてきた日中共同「異己」理解共生授業プロジェクトの成果の一端を授業を通じて公開し研究協議を行うものです。「異己」は、古くから中国で使われてきた概念で、価値多元化社会において異なる価値観や立場を持つ相手を意味します。国際委員会では個人間から国家間のコンフリクトを解決する概念として着目し、このプロジェクトを推進してきました。具体的

な学習活動では、児童・生徒の日常生活（身のまわり）に起きる価値のぶつかり合い、すなわち価値葛藤場面を意図的に設定し、グループやクラス、さらには日本と中国の教室で意見交換をしながら、「異己」の存在を意識し、そこから共生について考え、具体的なアクションを起こすことまでを射程に入れています。

当日は、学会員、海外ゲスト、一般参会者と授業を参観し、その後の協議を通じて、今後のプロジェクト研究の方向を検討できればと思います。

第２日目と第３日目は、自由研究発表・特別分科会、ポスターセッション、総会、公開シンポジウム、課題研究が行われます。

特別分科会では、「東アジアの国際理解教育」（仮）とテーマを設定し、日本・韓国・中国の３カ国の国際理解教育の現状と展望について協議を行います。日本は藤原孝章氏（同志社女子大学）、韓国はKang Sunwon氏（Hanshin Univ.）、中国は姜英敏氏（北京師範大学）に発表をお願いしました。

日本と韓国、中国の国際理解教育の現状と課題を検討しながら、国際理解教育の概念を再検討することができればと考えています。

公開シンポジウムは、テーマを「21世紀の社会に求められる育成すべき資質・能力と国際理解教育」と設定しました。今、21世紀の社会に求められる育成すべき資質能力は何かについて議論し定義すること、また資質・能力を育成するための教育課程をどのように編成するかの具体的な見通しをもつことは喫緊の課題となっています。これは、「キー・コンピテンシー」や「21世紀型スキル」などの汎用的な資質・能力を定義し、それを基盤にカリキュラムを開発しようとする国際的な教育の潮流に位置付くものといえます。一方、日本国際理解教育学会は、こうしたグローバルとナショナルな動向に対して、時に対峙し、それを包摂しうる市民像や知識、技能、態度・価値を含む目標を提示してきました。そこで、本シンポジウムでは、21世紀の社会に求められる育成すべき資質・能力と国際理解教育の関係を多様なアクター（教育行政、地域教育、研究開発校、教員養成系大学）の報告と具体的な実践を通じて検討し、これからの国際理解教育の方向を展望することとしました。

シンポジストとして、文部科学省から田村学氏（文部科学省初等中等教育局　視学官）をお招きしました。また、糸魚川ユネスコ世界ジオパークを活用した地域一体型の教育を推進している亀山浩氏（糸魚川市教育委員会）、６つのアビリテイの育成に向け、「グローバル人材育成科」を中核とした教育課程を開発し実践している濁川朋也氏（上越教育大学附属中学校）、教員養成系大学でグアムの先住民のチャモロとの交流等を実践している中山京子氏（帝京大学）をお迎えしました。また、自らスーパーグローバルハイスクール（SGH）での教育実践を推進している石森広美氏（仙台二華高等学校）に指定討論者をお願いしました。シンポジスト相互の意見交流とフロアーの皆さんの意見を引き出し、多様な意見の交流の場になると考えます。司会は藤原孝章氏と釜田聡が担当します。

研究大会の第３日午後には、研究実践委員会の「研究コミュニティのつながりを広げる」と題しての特定課題研究が予定されています。今年は、３年間の共通テーマ「国際理解教育における教育実践と実践研究」の仕上げとなる企画です。これまで、学校と地域の具体的なモデルを素材として、実践研究のコミュニティーの形成、実践的研究者の自立の道筋などを検討してきました。今回は、それらの実践研究をどうつなぎ、どのように研究ネットワークを広げられるのかを探るなかで、国際理解教育における実践研究の“これから”を描く予定です。好評いただいているワークショップ方式で考えます。多くの方々から積極的なご参会を期待しています。

今回の研究大会は、韓国や中国からも多くの先生方や関係者が参会し、特別分科会や自由研究で、発表してくださる予定です。韓国の先生方とは、本学会と韓国国際理解教育学会との長年の交流に裏打ちされた議論ができると思います。中国の先生方とは、日中共同「異己」理解共生授業プロジェクトを通じて、さらに交流が深まることと思います。その他、各分科会や協議の場、さらには懇親会で、本学会らしく、和やかで国際色豊かな交流の場になることを願っています。

最後になりましたが、多くの皆様のご参会をお願い申し上げます。

６月、上越の地にて、皆様をお待ちしております。

紀要編集委員会報告

帝京大学　中山　京子

編集作業中の22号の特集「道徳教育と国際理解教育」では、道徳教育について国際理解教育を軸に複数の観点から論考を示すことができました。23号の特集は「アクティブ・ラーニングと国際理解教育」です。一般投稿・特集への投稿、双方とも23号への投稿の締切は９月30日です。会員皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

23号特集「アクティブ・ラーニングと国際理解教育」の主旨

アクティブ・ラーニングは、次期学習指導要領の諮問（2014年11月20日）に取り上げられたことを契機に大きな注目を集めるようになっている。その論点整理（2015年８月26日）においても、次期改訂が目指す資質・能力を育むためには、学びの質や深まりが重要であり、課題の発見・解決に向けた主体的・協同的な学びとしてのアクティブ・ラーニングの育成が一つの焦点となっている。一方で、国際理解教育においてはこれまで、アクティブ・ラーニングという用語は使用されてはいないものの、主体的・協同的な学びを重視した教育実践が積み重ねられてきており、さまざまな学習の方法やツールが開発されてきた。しかし、国際理解教育におけるアクティブな学習方法をめぐる概念的な意味づけや枠組み、体系化や構造化、歴史的な展開、実証的な研究、資質・能力の形成、効果の測定、指導や評価のあり方・進め方、教員・ファシリテーターに求められる力量など、そのような学びを理論的・メタ的・包括的に捉える視点をもった研究はこれまで十分に深められてきたとはいえない。アクティブ・ラーニングが今日的課題となったこの期に、これまで蓄積されてきた取り組みや知見を振り返り、国際理解教育におけるアクティブ・ラーニングとは何かを問い直すことは、国際理解教育の方法論を進展させていく上でも意義が大きいと思われる。

そこで、本特集では、国際理解教育におけるアクティブ・ラーニングに焦点をあて、多様な視点から国際理解教育の授業をデザインする際の学習方法のあり方について考察することを目的としたい。

14号より紀要編集委員となり、16号から明石書店様より刊行することになり諸般の議論や手続きを経て、17号より副委員長・紀要編集委員会事務局を担当し、20号より編集委員長として編集に携わって参りました。９年間にわたる委員会活動で多くの論文から学ぶことができました。また、「紀要」というものが様々な手続きや要望、労力の末に存在していることを実感いたしました。投稿者の気持ちにたち、できるだけ丁寧な作業を心がけましたが、至らないところについてはお詫び申し上げます。投稿、査読、やりとり、編集のどの過程におきましても皆様のご協力を得ましたこと、改めて御礼申し上げます。

研究・実践委員会　公開研究会報告

ー兵庫県立尼崎小田高等学校ー

井ノ口　貴史

2015年10月23日、尼崎小田高校において研究・実践委員会の公開研究会が行われた。公開された授業は、国際探求学科２年生の「国際探求総学　グローバル・スタディーズ」（小林哲教諭）と同３年生「21世紀の国際理解」（福田秀志教諭）である。ここでは紙面の制約により、「国際探求総学」のみを取り上げて検討する。

尼崎小田高校における公開研究会は昨年度に続いて２回目になる。今回の２年生は、昨年公開授業「持続可能な社会を目指して－経済、教育、環境エネルギー、生活（食料・住居）、児童労働の視点から」で、グループでガーナ、アメリカなど８か国を調べ発表した生徒たちである。授業テーマは、「日本国は、自衛隊の参加制限を緩和し、国際連合の平和維持活動により積極的に貢献すべきである。是か非か。」であった。最終的に英語ディベートを行うために８チームを作り、ジグソー法を取り入れ、A国際連合の安全保障、B世界の平和構築の歴史、C/D日本の戦前戦後の憲法９条、自衛隊の国際貢献の歴史、E自衛隊についての中テーマを設定し、各チームから集まった生徒が８つの小テーマに分かれて調査を担当、中テーマごとにポスター発表をするための原案作成場面を公開した。

公開授業では、ホワイトボードを前に中テーマごと２班に分かれてポスター発表の原稿作りに取り組んだ。前時までに中テーマごとの班で小テーマ担当者が集めた情報を発表されており、そこで得られた知識をもとに５中テーマ計10班がポスター発表をするためのコンセプトを協議し、ポスター作成に向けた討議を行った。

情報共有とホワイトボード上で行われるコンセプト作りの実際を「B世界の平和構築の歴史」を例に具体的に報告する。小テーマとして教師によって設定されたものは、①第２次世界大戦終結と冷戦構造、②ポスト冷戦時代のヨーロッパでの安全保障環境の変遷、③多国籍軍について（湾岸戦争、アフガニスタン紛争、イラク戦争）、④世界各地で起きている紛争例（パレスチナ紛争）、⑤紛争例（アフリカにおける紛争）、⑥紛争例（ウクライナ紛争）、⑦紛争例（ISILの台頭）、⑧現在の世界の国々の軍事力（予算、兵力、兵器等）であった。

「世界の平和構想の歴史」としてポスターにまとめるとなった段階で、事前の調べ学習をもとに報告され、シェアされたはずの知識が繋がらず立ち往生してしまった。第２次世界大戦終結から冷戦時代までの歴史は整理できるが、ポスト冷戦時代に入ると、冷戦時代のように図式化することが難しく、構造的に把握することができない。合わせて、具体的に取り上げた４つの紛争例は、それぞれの原因や経過などは調べられているが、それを「９.11」後の国際情勢の中に位置づけて理解することができないため、生徒たちは世界の平和構築の歴史として整理できないことに気づいた。与えられた30分間ではポスター発表の原稿にはならず、疑問点を見つけ出すところで終わった。

公開授業を参観して気づいた点を指摘したい。第１に、英語教師の小林教諭が現代史、国際紛争、PKO、自衛隊と安全保障などを盛り込んだ総合的なテーマに取り組んだ点に敬意を表したい。社会科の教師でもこのような授業を実践している例はきわめて少ない。第２に、生徒が８つの小テーマを関係づけて理解することの必要性に気づいて、共同的な学びを通じてさらなる学習課題を発見することに繋がったことである。昨年に比べて学びの質は深まっている。第３に、生徒の学びを起点に研究コミュニティが拡がる可能性を予感させる点である。新たな疑問点や学習課題に気づいた生徒が、学校内の教師や外部の専門家に助けを求める可能性があり、それは国際探求学科の研究コミュニティを超えて新たな研究コミュニティをつくり出す事に繋がるであろう。

研究・実践委員会　公開研究会報告

－神戸大学附属中等教育学校－

宇土　泰寛

2015年11月24日、神戸大学附属中等教育学校において研究・実践委員会の公開研究会が行われた。公開された授業は、森田育志教諭による学校設定科目「ESD」である。神戸大学附属中等教育学校は、SGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定され、グローバルキャリア人育成神戸モデルを目標に掲げている。ESD（持続可能な開発のための教育）は、その学びの準備段階として位置づけられている。そして、ESDの実践は２つの取り組みを柱としている。一つが３年生（中学３年生相当）における社会科の週１時間（秋学期は週２時間）を学校設定科目として位置づけて行うESDの授業実践であり、もう一つがユネスコスクールや文部科学省指定研究開発学校、ESD日米交流プロ

グラム、ジャパンアートマイルなど全校的な取り組みとしての実践である。

今回の森田教諭によるESDの授業は、単元：「水を問い直す～ローカルな水からグローバルな水へ」で、人間が生きていく上で必要不可欠な水に関する課題を設定し、２つの目標を掲げて行われた。

①グローバルな諸課題を自己の課題として捉え直し、正確かつ批判的に分析・考察する力を身に付け、その課題に対して独自の解決案を提案することができる。

②他者の価値観や考え方の受容から、建設的な議論を促し、オルタナティヴな思考力や提案力を身に付ける。

授業は、基本的にローカルな内容を学んだ後、スケールを広げ、最終的にグローバルな課題へと発展させる形で構成されており、あらゆるグローバルな課題が自分たちの生活と切り離されたものではないことを生徒が段階的に学び取れるように構成されているのである。

授業の形態は、知識伝達型の授業ではなく、生徒自身が個人で考え、その後グループで考え、議論する時間を中心とした授業スタイルで、さらに、グループで議論したものをホワイトボードに記入し、全体で共有する。最後に、再び個人の思考に還元するという思考の循環を促すような仕組みとなっている。

実際の授業では、まず、水問題について学んできたことを振り返り、私たちにとっての水について、マインドマップやドーナツチャートなどの手法を用いて水の意識を可視化した。その後ローカルな水として、琵琶湖やため池、井戸水などについて考え、水は人と人、人と地域を結びつけるコミュニケーションの場になっていたことをつかみ、ナショナルな水問題としてバーチャルウォーターの問題やナイル川のようなグローバルな水問題についても考えてきた。そして、世界のすべての人に、水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保するための水条約の作成をグループに分かれて行った。

授業の後、約28名の参加のもと研究協議会が開催された。まず、授業者の森田教諭から、授業の流れとして、学びのフローと学びのスケールを意識して取り組んできたことや今後の進め方の説明があった。その後、最終的な学びのゴールの形、データの提示方法、各教科との関係、人間と水のかかわり、水の循環など、いろいろな質問とコメントが出された。

最後に、多面的に水を取り上げ、その学びも個からローカル・ナショナル・グローバルという順で考えさせ、最後は個に戻るという点など、多くの挑戦的な試みが評価された。ただ、授業について、直線的で美しいが、効率的な面が強く、学びには揺らぎも大切である。水というテーマの豊かさをどう生かすか、条約だけでなく、夢を描く授業など新たな提案や改善点も指摘された。

国際委員会報告

聖心女子大学　永田　佳之

2015年度は、ミレニアム開発目標からサスティナブル開発目標（SDGs）への移行の年であり、「ESDの10年」の後継事業であるGAP（グローバル・アクション・プラン）の初年であり、またパリで開かれた気候変動枠組条約締約国会議（COP21）による歴史的な「パリ協定」合意の年でもありました。この一年の国際委員会の活動をふり返ると、上記のような国際情勢の中、国際委員会の一つの任務でもある国際的な教育情報の把握については、SDGsやGAP、さらには気候変動教育（CCE: Climate Change Education）の情報収集に奔走したような一年でした。同時に、これまでに温めてきた日中の共同事業が漸く軌道にのり、また試行も含めて２度ほど実施してきた海外スタディツアーの経験をもとに新たなる具体案がまとまった年でもありました。ここでは、委員会活動の主な「稔り」として、これらの２つの活動の概要についてご報告します。

（1）日中共同「異己」理解・共生授業プロジェクト（「異己プロジェクト」）

昨年度、上記の正式名称のもとに中国との共同研究が実質的にスタートし、両国の小中学校で「異質な他者」との共生を射程に入れた実践を考えていくことなりました。2015

年５月には北京で日中の実践者・研究者によるセミナーの開催に漕ぎ着けることができました。柏崎第一中学校、上越教育大学附属中学校、宮城教育大学附属小学校のご理解とご協力を得ながら、国際委員会の釜田聡委員及び市瀬智紀委員がコーディネート役となり、両国で共通の授業が始まり、新たな時代における相互理解のあり方が模索されています。なお、第１回目の中間報告として第25回日本国際理解教育学会大会で自由研究発表を行いましたが、今後も同様に広く成果を共有していく所存です。

（2）海外スタディツアー

本学会の新たな企画として国際委員会では海外スタディツアーを企画・実施してきました。第３回目となる本年の企画は、2016年のゴールデンウィークを利用した北京ツアーです。現在、伊井直比呂理事を中心に通例のツアーではなかなか訪問できない北京市内の学校や歴史的な地を訪問し、現地の先生方をはじめ、中国ユネスコ国内委員会の方々とも交流もはかります。また、紫禁城　故宮博物院なども観光名所も訪れる予定です。詳しくは学会ホームページをご覧下さい。

以上の他、韓国で開催された韓国国際理解教育学会の大会に例年どおり本学会員も参加し、同学会との親交を深めたこともご報告いたします（詳細は本会報No. 46「韓国国際理解教育学会参加報告」を参照）。また、冒頭で触れた「気候変動教育」など積極的にユネスコも推進しており、国際委員会では収集した情報の発信にこれから務めていく所存です。

第16回　韓国国際理解教育学会の報告

北九州工業高等専門学校　荒川　裕紀

大会概要

韓国国際理解教育学会第16回大会は、ユネスコアジア太平洋国際理解教育院との共催、江原大学校多文化研究所の後援で、2015年10月31日に開催された。開催場所は、ドラマ「冬のソナタ」の舞台としても名高い、江原道春川市に位置する江原大学校であった。韓国国際理解教育学会会長のハン先生の勤務校であり、韓国有数の規模の、そして秋の紅葉が素晴らしいキャンパスでの開催となった。

今回の大会のテーマは「POST2015 世界市民教育：課題と実践」である。大会の流れは以下のとおりである、

09:00-09:30　登録受付
09:30-10:30　第１部
10:30-12:30　第２部
12:30-14:00　昼　食
14:00-18:00　第３部
18:00-19:30　懇親会

日本国際理解教育学会からは、藤原孝章会長をはじめ６名の会員が参加をし、前日より、韓国国際理解教育学会からの熱烈なる歓迎を受けた。以下に大会の詳細の報告を行いたい。

第１部（開会挨拶・開会の辞・祝辞・基調講演）

第１部は、まず韓国国際理解教育学会会長のハン・ゴンス先生の開会の挨拶ののち、共催のユネスコ・アジア太平洋国際理解教育院長のチョン・ウタク氏、開催校である江原大学校のイ・グァンヨル先生よりの歓迎の挨拶があった。３氏からは、我々日本からの参加者に向けて、日本からの参加があることが、特に現在の国際情勢を考えると、非常に心強く思う旨の話であった。そして本会藤原会長よりの祝辞へと続いた。

基調講演は、韓国学会の前会長のカン・スンウォン先生が行われた。なおタイトルは「人間安保と世界市民教育」であった。内容としては現在、様々な視点や文脈で「国際」が語られている。そこでは世界市

民教育とは異にする、軍隊教育など、対立する様な考えも含まれている。世界市民教育はこの流れの中で、どのように考えていくべきなのか。教育学だけではなく、様々なファクターから多面的に理解をし、方策を立てていくことがこれまで以上に必要ではないかとの主張であった。

第２部（企画シンポジウム）

企画シンポジウム（「世界市民教育：課題と実践」）では、延世大学のパク先生、中央大学校（韓国）のキム先生、そして本学会の藤原会長が発表を行った。課題の部分としては、パク先生は移民・難民研究の現況を示され、キム先生からは学校における世界市民教育として教員養成をいかに行うべきなのかを提示された。韓国での課題と実践を受け、藤原会長は「日本におけるポスト2015における課題と世界市民教育」との題で、ユネスコスクールの突出した増加に見られる様な、日本が政府主導で行ってきたESDについての紹介をされ、持続可能な開発目標としてのゴールにどのようなアプローチをしてきたかという日本独自の発展について、詳細に述べられた。その上で、SDGs、難民、平和・紛争などの国際情勢をふまえた教育の枠組みが必要であると主張された。実践については、自らが行っているタイ・チェンマイのYMCAとの実践事例（スタディツアー）を挙げられ、理念と実践のハイブリッドの必要性も説かれた。シンポジウムの討論では忠清教育大のパク先生、江原大のソン先生、全州教育大のイ先生らが加わり、各課題とそれに対する教育理念と実践について話し合われた。依拠している文献、そして国家の政治スタンスによっても教育は大きく異なる。一つの結論を出していく形のシンポジウムではないが、両国の言説や実践事例の紹介を交わらせる機会こそ必要である。

第３部（分科パネル：自由研究発表）

自由発表では、１から４までの分科会に分かれての発表となった。日本からは、私のほか、藤田ラウンド幸世先生、渡辺幸倫先生、宣元錫先生が発表された。３氏の行われた「多文化家庭の子育て戦略」に関しては、綿密なインタビューと実践に基づいた考察があり、興味深いものであった。韓国側からは、韓国でも同様の調査があり、定量的な調査、一般化、そして経年的に調査を行う必要性のアドバイスがあった。発表者たち自身が、生活としての実践を行っている方々ばかりで、質的な調査が「ライフワーク」を超えて「ライフ」として存在しているところからの研究報告であり、重みがあった。今回の「世界市民教育：課題と実践」をまさに象徴する、秀逸な発表であった。

感謝－新たなソナタを奏でていくために－

毎年変わらず、大歓迎して下さる韓国の学会員の皆さんには、本当に頭が下がる。東アジアの共生があってこそ、国際理解であり、世界市民教育の実践なのである。日本と韓国の両学会が、これからも互いの知恵を出し合いつつ、交わり、未来を奏でていくことこそが重要である。同じ研究・実践を行っている仲間を両国に持つこと、その姿を社会に示すことの大切さをより多くの先生方に体験し、実感していただきたい。

理　事　会　報　告

事　務　局

●第2回理事会

2015年度第２回の理事会が、常任理事会に合わせて2016年１月９日（土）に中央大学駿河台記念館にて開催された。理事13名及び事務局１名を含め計14名が出席した。理事選挙報告、各委員会・事業からの報告、次年度研究大会の進捗状況、第25回大会会計報告、韓国学会参加

報告、会報No.48の編集、後援会名義使用承認について報告が行われた。また、スタディーツアーの実施について審議が行われた。（各委員会報告参照）

理事選挙報告は、選挙管理委員会委員長風巻浩会員によりなされた。協議の結果、会長については藤原孝章会員が再選され、副会長には、中山京子会員、永田佳之会員が選出された。（下記理事選挙報告参照）各委員会からは、「紀要22号の編集進捗状況」、「紀要23号の特集について」、「研究実践委員会の研究成果の提示のあり方」をなどについての報告がなされた。また、研究実践委員会の研究成果については、「紀要以外でも提示できるのではないか。ＨＰにアップしたり冊子体で刊行する方法で、学会員に還元はできるのではないか」といった提案もなされた。第26回研究大会の進捗状況に関連しては、「シンポジウムテーマに関わって、『21世紀型能力』『グローバル人材』などにかかわり、学会としてどのように捉え、深めていくのか、議論が必要ではないか」などの意見が出された。

また、スタディーツアーの実施については、「学会の企画なので、多数の会員の参加が望ましい」「会員に周知するためにも、大会の案内にチラシを同封したい」「危機管理体制を十分に」などの意見が出され、国際委員会の予算の中で行うことが確認された。

●理事選挙報告

2015年12月に行われた2016-2018年度の理事選挙において、下記の12名の会員が選出された。

石森　広美、宇土　泰寛、大津　和子、釜田　聡、
桐谷　正信、永田　佳之、中山　京子、成田　喜一郎、
藤原　孝章、嶺井　明子、森茂　岳雄、山西　優二

（五十音順）

また、会長推薦理事として、下記の８名が推薦された。

伊井　直比呂、田中　泉、福山　文子、丸山　英樹、
南　美佐江、森田　真樹、横田　和子、吉村　雅仁

（五十音順）

事　務　局　通　信

日本国際理解教育学会第26回研究大会開催のお知らせ

・開 催 日 程：2016年６月17日－19日
　　17日（金）：日中共同「異己」理解公開授業（於上越教育大学附属中学校）
　　18日（土）：自由研究発表、ポスターセッション、公開シンンポジウム
　　19日（日）：自由研究発表、課題研究
・開 催 会 場：上越教育大学
・実行委員長：釜田　聡

寄　贈　図　書

●青木栄一編『大震災に学ぶ社会科学第６巻－復旧・復興へ向かう地域と学校－』東洋経済新報社、2015年
●渡部　淳＋獲得型教育研究会編『教育プレゼンテーション－目的・技法・実践－』旬報社、2015年
●金敬黙、マーカス・ベル、スーザン・メナデュー・チョン編『私、北朝鮮から来ました－ハナのストーリー－（日英対訳・バイリンガル平和教育教材）』アジアプレス・インターナショナル出版部
●諏訪哲郎監修、降旗信一・小玉敏也編『持続可能な未来のための教職論』学文社、2016年
◆会員の図書・文献寄贈のお願い
　会員の皆様が関わられました図書、報告書、教材などがございましたら学会にご寄贈下さい。紹介させていただきます。

新　入　会　員

以下の14名１団体が2016年３月31日までに入会を承認されました。

氏　名	所　属
星野百合子	愛知県立みあい特別支援学校高等部
越野　香子	熊本大学グローバル教育カレッジ
帝塚山学院大学国際理解研究所	（団体会員）
秋山　莉菜	関東国際高等学校
大平佑有子	渋谷教育学園渋谷中学高等学校
青沼　由衣	早稲田大学大学院
本山　　明	法政大学教職課程センター
渡辺　　登	長岡市立才津小学校
金城さつき	桜美林大学サービス・ラーニング・センター
神田あずさ	筑波大学大学院
片山　元裕	大阪教育大学学生
細谷　賢吾	長岡市立宮本小学校
齋藤百合子	明治学院大学
和栗　百恵	福岡女子大学
ベルコウィッツ・メリサンダ	名古屋大学大学院

事務局からの連絡とお願い

◆年会費納入のお願い

2015年度の会費をまだ納入されていない方は、できるだけ速やかな納入をお願いいたします。納入いただいた方には、学会誌『国際理解教育』Vol.21をお届け致します。

●正会員8,000円　学生会員4,000円　団体会員30,000円

●振込先（ゆうちょ銀行以外からの振り込みには店名、店番が必要となります）

ゆうちょ銀行から：記号00120-5、番号601555、加入者名　日本国際理解教育学会

他の金融機関から：店名〇一九（ゼロイチキュウ）、店番019、預金種目　当座預金、

口座番号　0601555、加入者名　日本国際理解教育学会

◆住所・所属等変更連絡のお願い

ご所属、ご住所などに変更がありましたら、事務局までE-mail（jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp）にてご連絡いただきたくお願いいたします。

◆学会誌『国際理解教育』バックナンバーの購入手続きについて

明石書店から発行されております『国際理解教育』の16号以降につきましては、お近くの書店にてご購入が可能です。それ以前の紀要につきましては、事務局にて販売致しております。在庫希少で販売できない号もございますが、ご購入をご希望の方はお気軽に事務局までお問い合わせください。会員価格でご購入いただけます。

◆フェイスブックのご案内

学会からの発信ツールとして、これまでのホームページ（http://www.kokusairikai.com/）に加え、あらたにフェイスブックを活用することとなりました。ご興味のある方は、是非フォローしてみてください。

編　集　後　記

ニューズレター 48号をお届けします。今回も諸般の事情で私が担当することになりましたが、理事改選期を迎え次回からは新しい学会体制によるニューズレターの発行になります。これまでの３年間は、会長挨拶でも述べさせていただきましたが、内外の教育課題が大きく動いた時期でした。今後も、会員の皆様に支えられ、ともに切磋琢磨していくことができればと考えております。（藤原孝章）